

IV-210

「散歩」に着目した歩行空間のあり方について

九州大学工学部 正員 坂本紘二

正員 外井哲志

日本道路公団 正員 花田克彦

1. はじめに 歩行空間はヒューマンスケールの空間であるから、その評価には、構造的なものだけでなく、人間が視覚的、身体的に感じる全体的雰囲気や歩行空間と沿道との調和、両者の一体感がかもしだす雰囲気といったものを十分に考慮しなければならない。また、歩行空間は同時に地域と密着した空間であり、沿道に立ち並ぶ建物や施設と不可分であって、沿道地域の土地利用、市街地の形態・景観・地域社会の形成の面での大きな役割を担っている。したがって、地域の歴史性や個性を感じさせるとともに、共同体としての感情を形成させる機能をそなえていなければならない。このような歩行空間を整備していくためには、歩行者が現状の歩行空間をどのように感じているかを知ることが必要不可欠となる。特に、歩行空間をじっくり観察でき、雰囲気を味わうことができる人々に話を聞くことは有効であろう。そこで本研究では、歩道における人間らしい利用の最たるものとして、日常生活の中の「散歩」に着目し、「散歩者」が現在の歩行空間をどのように評価しているかを調査した。

2. 散歩の特性

(1) 散歩の特質 まず散歩においては、多くの人が開放的になり、顔見知りになって気楽に会話するようになる。散歩は生活のリズムを与えてくれる屋外の社交場を提供する。散歩が風景に接するのにちょうどよい速度を提供し、町の風景や自然をじっくり観察できる。自然の変化を体感し、様々な情報を得て町を再認識し、散歩を長期間継続することで町や自然に親しみを覚えるようになる。さらに、散歩は特別な準備を必要とせず、また自由な解放された空間と時間を提供する「遊びの原点」であり¹⁾、それゆえに、日常における精神の「とらわれ」から人々を解放する役割を果たし、「思索の原点」ともなりうる²⁾。散歩を通して人々は様々な事物や人々と出会い、自由と寛ぎの中で見、眺め、発見し、遊び、考える。その中で地域に対する共同感情の形成

と確認が行われ、地域への愛着の源ともなる。

(2) 散歩中の行動と散歩道の条件

散歩や町・道について書かれた随筆などから、散歩に関する記述を抜粋し、散歩中の行動³⁾と散歩道の条件^{4), 6), 8)}を整理してみた。

散歩の行動としては、『歩く(move)』、『立ち止まる(stop)』、『休む(rest:stay)』が基本になる。より詳しくみれば、まず、『歩き』ながら、「見る」、「話す」、「考える」、「音楽やラジオを聞く」、「花の香りや生活の匂いをかぐ」などの行動が行われる。やがて、興味を覚え、精神を集中すべき状況にいたれば、『立ち止ま』って、「眺める」、「観察する」、「記録する」、「地図を見る」、「道を尋ねる」、「史跡案内を読む」、「写真を撮る」、「石などを拾う」、「花を摘む」などの行動をする。そして疲れると、『休む』ために、よい場所を「さがし」て、「しゃがみこむ」、「腰掛ける」、「寝ころが」り、『休む』あいだに、「飲食する」、「本を読む」、「体操する」、「遊ぶ」などの行動に移ることもある。場合により、散歩のついでに「神社に参拝する」、「買物をする」などの行動も考えられる。

楽しく散歩ができる道の条件として、①美しい風景、水辺(河沿い)の空間があること、②車を意識せずに歩けること、③開放感があること、④曲がりくねった道、坂道、曲がり角などの変化があり、発見があること、⑤町の歴史を肌で感じることができ、つまり歴史を感じる、⑥路面や道端の自然(草花や樹木)あるいは人物等、観察できる材料や対象があること、⑦生活の匂い、風景を感じさせること、などが浮び上がってくる。

このように、落ちつき、親密さ、美しさ、自然性、生活臭、時間的・空間的広がりを感じさせること、あるいは、出会い、発見があることや共通感覚など実にさまざまな要素が散歩における歩行の快適さを構成し、散歩者のさまざまな想いや思索を誘っていることがうかがえる。

